

あぼしまち交流館歴史講座では、年に1回外部講師をお招きして講演会を開いている。今年度は4月に、はりま地盤・地震研究会の代表を務めておられる西影裕一氏をお迎えして、関東大震災をはじめとするこれまでの日本の被災状況や山崎断層について、また網干の液状化現象の可能性など約2時間にわたってユーモアを交えながら分かりやすく教えていただいた。

今年は元日から能登半島地震が起こり、改めて日本が地震大国であることが実感されたが、先生によると日本では地震計の精度が良くなっていることもあって年間10万回の地震が起こっているそうだ。世界の地震の1割は日本だという。また震度は人が感じる揺れであるが、マグニチュードは地震のエネルギーを表し、マグニチュード7では地盤が2mずれるらしい。熊本地震などの実際の写真を見せていただいて、改めて大地のエネルギーのすごさが分かった。また地震には最初にガタガタという縦波(P波)が起こり、次に横波(S波)が来る。この間の時間を7.5~8倍すると震源までの距離が分かれると教えていただいた。姫路に最も近い山崎断層も貞観10年(868年 平安時代前期)以来マグニチュード7級以上の地震記録がないので、かなりエネルギーが溜まっているようだ。中国縦貫自動車道が山崎断層の上を通っていることは何となく知っていたが、実際断層の写真を見せていただくと、証拠を見せられたようで少し怖かった。

網干地域については元々海だった所が多いので、砂層であり地盤が固くない。海が後退してから人も少し土地の高い砂堆に家を建てて住んでいた。もし大地震がくれば、砂層が揺られて沈下し、水が噴き出して液状化現象が起こる可能性が大きい。その時になって慌てるのではなく、常に災害に備えることが大切である。災害時にはいろいろなデマや間違った情報が出回るが、それに惑わされずに、正しい知識、判断力、行動力が必要となる。それには日頃から訓練に参加し、イメージトレーニングをしておく必要がある。

また最後に地域の人間関係の大切さを述べられた。日頃から隣近所との声かけなど、ささやかなつながりがいざという時に大事な絆となってお互いの命を救うことになるかと改めて教えていただいた。

ちなみにこの講演会の2日後の夜、豊後水道を震源とする震度6弱の地震が起こった。姫路でも震度3を記録し、改めて地震の怖さと日頃からの備えの重要性がよく分かったように思う。

網干歴史講座会員 浜田 中川千里



・西影先生の著書

『自然災害で被害なんかにあいたくない』
～防災に役立つ姫路の地形・地盤データ～

